

## 趣味の仕事に就いて

酒井 孝則

### 1. 職の分岐点

私は昭和40年代の工学部学科新設に伴う技術員定員の一人として入職した。入職当時は公務員より民間企業に人気があり、同級生の大半は民間に就職した時代であった。私も現在のJRに採用内定して自宅待機を余儀なくされたため、アルバイトで現在のNTTに勤務していた。ところが、在校中に学力テスト気分を受験した初級国家公務員採用試験に合格していたため、当時の庶務課人事係長の自宅訪問で勧誘を受け、初任給14,400円の「デモシカ公務員」になった次第である。振り返ればこれが第1分岐点で、本学に採用直後は庶務課文書係に仮配属となり、間もなく工学部工業化学科の技術職員に配置され、初めて大学の教育・研究現場を経験した。しかし、電気系区分試験で合格した思い上がりから化学系の技術業務には馴染めず、中部人事院にまで要望書を出したりして、新設された電子工学科によりやく配置換が叶った。これが第2の分岐点となった。

その頃の電子工学分野は、まだ真空管と半導体デバイスが混在していた頃であった。しかし、その後の目まぐるしい商品開発は、特に電子機器や家電製品で“軽薄短小”の技術に向かって日進月歩の勢いで加速した。私は長年にわたり小講座の教育・研究支援技術者の立場で電子計測器や回路部品のユーザとして、これらの急激な発展の様を実体験させてもらえた現在の職業に満足感を持っている。そして、今や生活環境で目に触れる全ての製品に電子デバイスが組み込まれる時代に埋没している。

### 2. 電子回路製作技術者として

私は趣味を仕事にして来た幸せ者です。高校時代から真空管式のラジオやオーディオアンプの製作に興味を持ち、実体配線図を片手にハンダ付けを楽しむオタクでした。当時は市内唯一のパーツショップであったマルツ電波で電子部品を買い漁り、この頃はお金が無いために福井大学職員を笠に多額の売掛金を抱える自己破産者でした。この道楽的趣味は、結局中途半端な終焉を迎えてしまいました。

それでも趣味で培った技能や知識は、これまでの教育・研究用に製作してきた多くの電子回路装置として実験成果に多少なりとも貢献できたと自己満足しており、また、ハンダ付け不良で動作不良が一度も無かったことも自慢できる。特に、アナログ回路製作の経験は長く、幾度も増幅器＝発振器を実証しており、何日も徹夜でノイズ対策に明け暮れたこともある。そもそも自己設計した回路は製作してもほとんど理論通りには動作しないのが常で、試練と山勘の積み重ねが回路技術者冥利に尽きる分野である。しかしながら、こうした技術者魂もアナログ信号のデジタル化が急速に進展するとともに徐々に失せて行くことに一抹の寂しさを覚えるのは私だけではないだろう。

ここに、技術部の日常研修予算の助成を受けたことが契機で職務発明ができ、商品化したタイムキーパー『福一目』を右図に紹介させていただき、今後の福井大学ブランドの普及と技術部の宣伝効果および少額な資金源として少しでも寄与できればと願っている。





### 3. 技術部組織での活動

平成5年に技術部組織が発足してから私の職務内容も徐々に変化した。特に、3技術室・6班構成の第三技術室システム制御班の班長になってからは、グループの年長者というスタンスで班所属のスタッフと専門研修を立上げ、傲慢にも「アナログ電子回路の基礎」を修得する課題からスタートした。輪講と実習を中心に日常技術業務に負担が掛からないよう配慮しつつ、各自がノルマーを達成して順調にスキルアップが図れた。また、研修中はスタッフ各自が経験上のノウハウやキーポイントを互いに紹介し合い、活字では表現できない技術が多く習得でき技術継承にも繋がったと考えている。その他にも専門研修の効果は得るものが多いことを強調しておきたい。したがって、今後の技術部が大学で必要となる高度な専門技術者集団を構築するのなら、技術長や班長が先見性を持って自ら率先して専門研修を企画・実施し、その成果を学内にアピールするグループリーダーとしての責務がある。

技術部組織ができて真価を問われたのが、大学の地域・社会貢献行事の一つである以前のオープンキャンパスであり現在の一泊二日遊学への参画であろう。それまでにも技術職員は配属先学科や研究室個別の企画実施に協力していたが、組織が主体となって独自に企画運営する機会を初めて得た。

これを受け、当時の技術部連絡会では各技術室1企画を実施する方向で提案し、それ以来現在に至っている。幸いなことに私の所属していた第三技術室は、「電子工作」のジャンルでスタッフ一同の協力体制が整い、全員で電子工作キットのアイデアから創作まで自主企画を継続している。こうした先見性を持って基盤を築いてくれた先輩各位に改めて深謝申し上げる。その後、この電子工作企画も「ものづくり教育」とリンクし「公開講座」にも発展し、過去2回にわたって実施した。電子工作は、私の専門分野に近いこともあり出過ぎた真似ばかりしてきたが、スタッフの全面的な協力にはお礼の言いがたい。今後も引き続き子ども達に、ものづくりの感動と達成感を与えて未来の福井大学工学部志願者を育ててください。

### 4. 突然の統括技術長職

福井大学文京キャンパスの技術部組織が、平成18年度から工学部に帰属する組織に変更となった。そして組織化以来のスタッフ制が一部職階制を採り入れた組織形態に大変革し、依りによって年長者の私が統括技術長（課長相当職）のポジションに就いてしまった。これまで一人職場の技術畑を歩み、平成16年度からはVBLに足を踏み入れ、17年度からは企業との共同研究に着手した矢先の出来事であったため路頭に迷った。課長相当職といっても管理職であり、技術部の28名を統括するなど、かつて技術職員では誰も経験していない職に戸惑わない筈がない。当初に、技術長3名と班長6名の技術部連絡会を中心に組織強化と運営を図り、同時に今後のリーダー育成を謀ることを提案したが、4月の時点で見事に班長連から突き放されショックを受けた。しかし、役割を引き受けた以上は、日々の前記技術業務と事務管理職業務を完遂せねばならず、体重が4kg減った。特に、超過勤務等の勤務時間管理者、出張などの旅行命令権者としての捺印行為の重責には身が引き締まった。また、上司である技術部長も着任早々から新設助手制度と人件費のポイント制や技術職員の職務評価制度の導入など新たな課題と取り組み、少なからず統括技術長も影響を被った。しかし、部長にとっては「棘に釘」の私に落胆したことであろう。そこで、将来の統括技術長には2年以上にわたって組織のマネージメントができる人材を抜擢し、理念に基づく活力ある組織づくりに精励してもらいたいと思う。

最後に、長期にわたり多くの方々にご指導、ご鞭撻を頂きながら大過なく務めを果たしましたことに、深く感謝申し上げますとともに、皆様の今後のご活躍とご健康を、心よりお祈り申し上げます。